

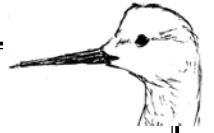
あじさい



第 124 号

2025 年 3 月
日本野鳥の会三重 <http://miebird.org/>

木曾岬干拓地鳥類生息調査報告（2025年1月）



桑名市 近藤 義孝

過去の木曾岬干拓地での調査は、しろちどり第108号(2021年3月発行)やチュウヒサミット2024(2024年11月)などで報告しています。今回は、2025年1月までに行われた調査について報告をします。この調査は、日本野鳥の会三重、日本野鳥の会愛知県支部などの有志で、2002年より行われています。

木曾岬干拓地の現状

現在、木曾岬干拓地第二期環境整備事業が進行中です。チュウヒサミット2024でも報告していますが、概略を右図に示します。

第2期開発計画現在造成中となっている場所では、樹木の伐採と土砂の搬入が行われています。

木曾岬干拓地では、ここ10年の間、樹木の発達が目立ち、草原から森林への遷移が進行していました。保全区では、三重県によって樹木の伐採が行われています。その他の場所では、チュウヒの繁殖に適していないと思われるような遷移が進んでいました。



目次

表紙の言葉	2
木曾岬干拓地鳥類生息調査報告(2025年1月)	2
地上で寝るタカ、チュウヒ	5
地元の山林で越冬する冬鳥達	7
野鳥記録	8
ミヤコドリついに300羽を超える	11
推しの一枚 ハヤブサ	12
ガンカモ調査終わる	12
事務局だより	13
探鳥会報告(2024年11月~2025年1月)	13
シギ・チドリ類の年齢・季節による羽衣の変化 ~購入について~	16
編集後記	16

表紙の言葉

ヒヨドリ

度会町 小坂 里香

地味な普通種代表のヒヨドリ。人気がないばかりか、冬場は大挙して野菜畑を荒らすギャングとして嫌われてさえいます。

探鳥会でも、そこにいないがごとく、せいぜい「なんだヒヨドリか」の一言で片づけられてしまうことが多いけれど、よく見るとなかなかシックで繊細なレースのようなスカートをまとっていることがわかります。そんなヒヨドリでも、バードウォッチャーの注目を集める季節が春と秋。桜の季節には嘴を花粉で黄色く染めて蜜を吸い、渡りの時には雲のように群れをなして海を越えていく姿が撮影の絶好の被写体に。桜の花に囲まれたヒヨドリの姿も、メジロやに負けずなかなか絵になるのではと思うのは私だけでしょうか。

チュウヒの繁殖状況

表1に示すように、木曾岬干拓地では2020年から繁殖ができていません。ただ、2020年3月には交尾を確認し、2023年は雄が巣材を運び、雌への求愛行動も観察できましたが、どちらも繁殖に至りませんでした。

木曾岬干拓地以外では、近くの愛知県内で繁殖が確認され、ヒナの誕生も確認できています。一昨年と昨年の夏から秋にかけて観察されたチュウヒの幼鳥は、近くの繁殖地で巣立ったものが飛来したと思われる。

表1 木曾岬干拓地でのチュウヒの繁殖状況

年	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
営巣数	3	3	3	2	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1
繁殖成功巣数	0	3	2	1	1	1	1	2	0	0	0	1	1	1
巣立った幼鳥	0	3	2	2	1	1	3	6	0	0	0	3	2	4

年	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
営巣数	1	1	1	1	1	0	0	1	0
繁殖成功巣数	1	0	0	1	0	0	0	0	0
巣立った幼鳥	3	0	0	1	0	0	0	0	0

ねぐら調査 地上でねぐらをとるチュウヒ・ハイイロチュウヒ・コチョウゲンボウ

2002年からの調査結果を表2にまとめました。最新の2025年1月18日に実施したねぐら調査では、チュウヒ8羽のねぐら入りと、ハイイロチュウヒ6羽、コチョウゲンボウ1羽、オオタカ1羽、ミサゴ1羽が観察できました。

チュウヒは、2020年ごろから10羽前後が木曾岬干拓地をねぐらとして利用しています。木曾岬干拓地の開発が始まる前の2003年1月には、35羽が観察できました。また、その前年の2002年12月には、コチョウゲンボウが44羽観察されました。チュウヒ、コチョウゲンボウ、ハイイロチュウヒは、樹上ではなく地面にねぐらをとる鳥類です。

2024年1月4日の調査では、ハイイロチュウヒ10羽のねぐら入りが観察できました。そのうち、少なくとも7羽が雄の成鳥でした。ねぐら入りの様子はビデオにとられていて、7羽は一定の距離を置いて同じ方向に移動していました。個体間には距離(数十m～数百m)がありました。ハイイロチュウヒの雄には、ねぐら入りする前に追尾行動をする特徴が知られています。著者は、過去に二回それぞれ3羽の雄の追尾行動(2011年1月と2023年1月)を木曾岬干拓地で確認していました。この時は、観察していた望遠鏡の視界に同時に3羽が入りました。



ねぐら入りするチュウヒ



ハイイロチュウヒ♂の追尾行動

表2 木曾岬干拓地ねぐら調査結果(2002年～2025年)

年	2002		2003			2004	2005		2006	2007	2008	2009		2010		2011		2012		2013		2014	
月	2	12	1	2	12	12	1	12	12	11	12	1	12	1	12	1	12	1	12	1	12	1	12
日	13	7	18	15	12	18	28	10	16	24	20	17	19	16	18	15	17	21	15	19	20	18	20
チュウヒ	16	27	35	19	27	16	14	22	20	12	12	9	15	7	24	22	8	11	10	15	5	13	5
ハイイロチュウヒ	2	6	4	4	3	2	2	2		2	1	1	2	3	1	6		3	1	2		1	
コチョウゲンボウ	4	44	25	29	22	8	8	6	6	18	6	9	1	2		5	1	6	9	10			
チョウゲンボウ																1							
オオタカ	1		1	2		2		2	2	1	2	1	1	1			1	1	1	1		2	
ハイタカ						7		1															
コミズク								1															
ノスリ		3	1	1	1	2	3	3	4	5	6	9	3	5	3	4	5	1	2	1		1	
ミサゴ	3	10	9	3	4	6	4	7	9	7	8	10	5	5	2	5	4	8	7	5		5	
ハヤブサ					1	1		1	1								1		1				
トビ																							
種数	5	5	6	6	6	8	5	9	6	6	6	6	6	6	4	6	6	6	7	6	1	5	1

年	2015		2016		2017		2018		2019		2020		2021		2022		2023		2024		2025			
月	1	12	1	12	1	12	1	12	1	12	1	12	1	12	1	12	1	12	1	12	1	12		
日	17	18	16	17	21	16	20	15	19	21	18	19	4	11	4	17	4	21	16	4	21	5	18	
チュウヒ	7	17	13	6	1	6	6	8	14	8	6	10	12	6	8	7	8	8	8	8	10	7	8	
ハイイロチュウヒ	2	2	1	3	1	1	2		1			4	1	1	3	1	4	6	6	10	5	1	6	
コチョウゲンボウ	2			2			1																1	
チョウゲンボウ	1																1							
オオタカ	1			2			1								1							1	1	
ハイタカ									1															
コミズク																			1					
ノスリ		1	1	1	1	1			1	1					2		1	1		4	1	1		
ミサゴ		4	3	5	6	4	1	1	4	3	4				2	5	3	3		3	3	3	1	
ハヤブサ	1										1								1					
トビ									1						1		2				3		3	
種数	6	4	4	6	4	4	5	2	6	3	3	2	2	2	6	3	6	4	4	4	5	4	6	5

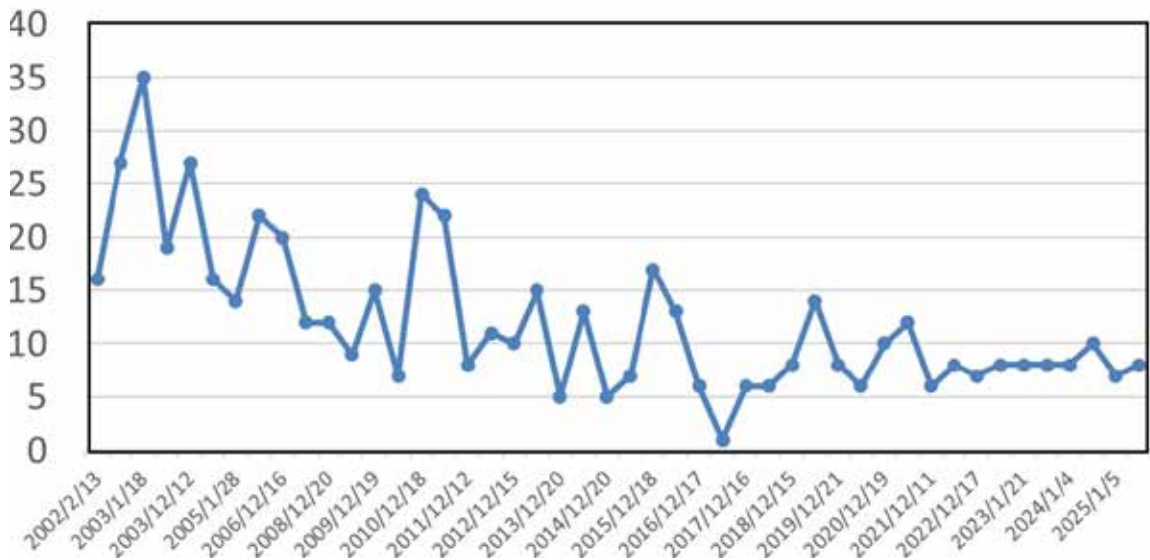


図2. 木曾岬干拓地におけるねぐら入りチュウヒの個体数 (表2の数値をグラフ化した。)

その他の鳥類生息状況(2019年11月～2025年1月)

しろちどり 120号に発表されたように、2023年6月にカササギが確認されました。また、同じく120号の野鳥情報に2023年11月にはサンカノゴイが記録されています。また、2023年12月には、コミズクが、今年2025年1月18日のねぐら調査では、ヒシクイが観察されました。2020年から繁殖が確認されていたオオタカは、営巣木が枯死したためうまく繁殖できませんでした。



ねぐら入り調査で確認されたヒシクイ



地上に巣を作るチュウヒ

タカというと読者諸氏は何を思い浮かべるだろう。三重でよく見られるのはノスリくらいか。今は少なくなったが、オオタカやサシバはかつて、多く見られた。これらを思い出す人も多いのではないだろうか。これらのタカは木に巣を架け、山の中や山手の田んぼに生息する。

ところがここで問題にするチュウヒ (Eastern Marsh Harrier: *Circus spilonotus*) は全く違った生活をしている。巣は地上に作る。地上と言っても、大きな川の河口付近のヨシ原、高茎の草原の中に巣を作る。北海道ではササ原に巣を作ることが多いようである。地上に営巣して、成功するのか心配になるが、広大な河口のヨシや高茎の草原はキツネやイタチなどの地上性捕食者でも中々入れるものではない。入っても首尾よく、巣やヒナに到達できる可能性は極めて低いだろう。また、キツネやイタチも見通しのきかないヨシの中に入ろうとはしないのではないか。

著者は若い頃、オオヨシキリの巣を探しにヨシ原に入ったことがある。入ったとたん、見通しが全く効かない。どちらへ行けばヨシ原から出られるのかわからなくなる。それにムツとするほど暑い。それ以降、夏のヨシ原に入るのはやめた。

今ほど開発されていなかった時代、本州でも大河の広大な河口周辺にはチュウヒが安心して繁殖できる場所が多くあったに違いない。木曾岬干拓地のある愛知三重県境の木曾三川河口地帯も、江戸時代までは治水工事があまり行われず、道も確定され

ず、交通はもっぱら桑名と熱田を航行する舟で行われていた。その頃はチュウヒも繁殖していただろうが、何分、タカ狩りにも使われたいチュウヒについての記録は見当たらないようである。

残念ながら、現在、日本でのチュウヒの繁殖数はごく、限られている。昨年開催されたチュウヒサミット 2025 で報告されたのは全国で 135 つがい。それも北海道では 116 つがいだが、本州では 19 つがいだけで、それも安定して複数つがい繁殖しているのは石川県河北潟だけである (浦 2024、中川 2024)。国外ではバイカル湖以東で繁殖とされているが、大陸での情報に接したことがない。おそらく、ほとんど調査されていないのであろう。

採餌

チュウヒは餌を捕るのも地上付近である。ヨシ原や高茎草本の草原の上を、風を利用してゆっくりと飛びながら、草の中に潜むネズミや小鳥類を探す。見つけるとヒラリと身をひるがえし、長い脚でつかみかかる。いつも成功するとは限らないがこの方法で捕まえる。獲物は目で見つけるだけでなく、草の中を動く音も利用しているという。チュウヒは他のタカと違い、平面的な顔で、両耳で音源を立体的に把握できるようである。他のタカのように全速で追いかけるようなことしない。餌を探しているチュウヒを見ると、弱々しいさを感じる人も多いのではないだろうか。余分なエネルギーを使わないチュウヒ流のやり方なのである。



草原の上を飛んで餌を探すチュウヒ (笹間 俊秋 撮影)

峙（ねぐら）

もうひとつ、めずらしい習性がある。チュウヒ類はタカ類にはめずらしく、地上で寝る鳥である。また就寝時には多数個体が集まる集団峙となることもある。峙はやはり、ヨシ原など、立木の少ない場所である。ただ、峙入りは日没前後にだけ見られる現象で一般のバーダーには気づきにくいし、かつ、写真を撮る条件が難しいのでカメラマンが目することも稀であろう。

峙入りでは日没頃からチュウヒが集まり始め、付近の樹木にとまったり、ゆっくりと周囲を飛んだりしているが、あたりが暗くなりかけた頃にずっと地上に舞い降りる。

チュウヒ属のハイイロチュウヒもチュウヒと共に集団峙に入っている。また、分類群ではかなり離れているがハヤブサ属のコチョウゲンボウも地上で峙をとり、木曾岬干拓地ではチュウヒなどと共に峙入りが観察されている。同じハヤブサ属の鳥でもコチョウゲンボウやハヤブサは平地の地上で寝ることは無いようである。日本でのチュウヒ峙については渡良瀬遊水地で1990年代から知られており、詳しく研究されている（平野2018）。

越冬地と渡り

サシバやハクマでは集団で渡ることがよく知られているが、チュウヒでは集団の渡りは知られていない。おそらく、単独で、あるいは数羽で渡るのであろう。越冬地は本州以南である。チュウヒネットワークの調査によると東海地方以東での本州で約140-290羽、近畿地方以西で約60-130羽が、すなわち200-420羽が越冬していると推定されている（多田2024）。

北海道および、本州での繁殖個体は前述の浦（2024）の示した繁殖つがい数135から推定すると400個体以下であろう。すなわち、日本での繁殖個

体と越冬個体とほぼ同数である。また、大陸で繁殖する個体が日本列島で越冬することも想定できる。図鑑などでは大陸型との記載があるが、脚輪や発信機装着などで大陸由来であることを確かめられた事例はない。北海道で見られた個体が本州で越冬樹に見られたとの報告があるが、数量的にどれくらいの個体数が北海道一本州を行き来しているのか分からない。今後、チュウヒに発信機やフラッグを付けることによる渡りの解明が望まれる。

チュウヒはバイカル湖以東のロシア極東部、中国、東南アジアに生息している。国際自然保護連盟（IUCN）のホームページによると、個体数は40,000から60,000とされ、絶滅の危険の少ない、LCに区分されている（著者不詳2024）。しかし、この評価が、どのような根拠によっているのか不明である。人口密度が高く、経済発展の著しい中国でのチュウヒの繁殖地、越冬地はどうなっているのだろうか？気になるところである。

引用文献

浦 達也 2024 チュウヒの国内繁殖つがい数の推定. チュウヒサミット2024 予稿集 12-13.

多田英行 2024 越冬期のチュウヒについて（生態の概要、保全上の課題）. チュウヒサミット2024 予稿集6-14.

中川富男 2024 北陸地方におけるチュウヒの現状（能登半島地震の影響など）. チュウヒサミット2024 予稿集22-24.

平野敏明 2006 渡良瀬遊水地におけるチュウヒの生息状況と環境利用. チュウヒサミット=サミット2006 予稿集 20-27.

Clarke, R. 1995 The Marsh Harrier. Hamlyn, London.

著者不明 2024 Eastern Marsh-harrier
<https://www.iucnredlist.org/species/61709141/203625947>

閲覧 2025/1/27



志登茂川河口